

本 書評

きんよづんが

エコソフィア第一号 自然と人間をつなぐもの

自然科学と人間学の統合めざした 新しい雑誌の誕生なるか

安成哲二 (やすなり てつぞう・筑波大学地球科学系教授)

これまでの学問の領域や手法、考え方にとらわれず、自然と人間の関わりかた

を、地球上のさまざまな地域での実地の調査や研究から模索しようとする研究者や市民グループによる活動の報告と議論の場として、『エコソフィア』と題する新しい雑誌が創刊された。

創刊号での圧巻は、美しいカラー写真をふんだんに使った「生命の多様性にあこがれて」という巻頭の特集である。これは、ツリータワー（木の上へ上がるためのタワー）とウォークウェイ（木と木の間を架けられた簡易吊り橋）という新しい手段で、ボルネオ島サラワクの熱帯林での生き物たちの生態と自然史を研究していた故井上民二氏による最新の研究の紹介である。井上氏は私の大学探検

部時代からの畏友であったが、悲しいことに、昨年九月、このサラワクでの調査へ向かう途中、彼のごよなく愛した熱帯林上での航空機事故で急逝した。

彼の遺稿ともなったこの号の記事は、熱帯林の生物の多様性が約一億年という年月をかけて、その植物と昆虫たちの相互作用と共生によって形成されてきたこと、「一斉開花」という数年に一度だけ花が一斉に咲き、実が成るという不思議な現象に、昆虫たちの微妙で巧妙な働きがみごとに仕組まれていることなど、驚くべき新しい事実を、しかも専門ではない人たちにもわかりやすい語り口で報告している。そして、最後に、「自然は」やっぱり全体をみる、ものすごくしんどいけれども、みんなを全体をみるしくみを考えていかな

いといけないと思います。論文を書きやすいテーマで、ある部分だけを分析主義でみるというのでは、とても理解できない世界がある」という現在の科学に対する批判で締めくくっている。

確かに彼と彼のグループが明らかにした、あるいはしつづつある現象は、これまでの植物生態学や昆虫生態学だけでは見えず、むしろ生き物をまるごと見るという態度からはじめて「見えてきた」現象であった。観測にもとづくこのような新鮮でわかりやすい報告は、熱帯林保護がなぜ必要か、生物多様性の維持がなぜ必要かということとを、百の理論よりもはるかに説得力をもって説明してくれる。さて、この新しい雑誌には、前述の特集のような報告、論文が満載されることを私は期待している



が、創刊号の他の部分を見る限り、多少の懸念と危惧をもたざるをえない。この雑誌は、関西の研究者を中心とする民族自然誌研究会の機関誌という形をとっているようであるが、雑誌全体のコンセプトがいまひとつ、はっきりしない。会員は、編集委員の顔ぶれと研究会報告を見る限り、人類学、民族学、生態学、農学、地理学などの研究者や学生が中心のようである。この雑誌は、「自然と人間」を問いなおしていこうとする、あらゆる方々にひらかれた学術雑誌」をめざすということで、編集の趣旨にはわたしも非常に共感する。しかし、そのためには、新しい哲学と心構えが編集者には望まれる。「身近な環境を凝視し」「フィールドサイエンスを重視した」内容の報告を重視するという編集

『エコソフィア』編集委員会/編
民族自然誌研究会/発行、昭和堂/発売
1500円(年2回刊)
ISBN4-8122-9821-0

※価格は本体価格(税別)です。

週刊金曜日 1998.10.9 (238号)

者の方針はひとつの大事な見識であろうが、このこと自体は「人間と自然」の関係を問ひ直すキーワードでは、必ずしもない。編集委員による座談会は、これまでの科学の「個別性から普遍性へ」の方向を、「普遍性から個別性へ」変える必要性をあえて強調しているが、はたしてそれだけでいいのだろうか。今、環境問題で問われているのは、地域での事象・現象が、あらゆる意味で有限な地球とどう関わっているかという視点である。私は考える。その意味で大事なことは、地域からの視点と地球からの視点がどうからんでおり、どう調和できるかといった問題群についての議論を深めることであり、その線に沿った新しい見方、行動指針などを示した論文、報告をより積極的に取り上げることではないか。

このこととも関係するが、一部の研究者に限らず、専門外の市民や学生にも広く読んでもらいたいということならば、特定分野の学会の研究者を念頭において書かれたような「学术论文」を、安易に載せるべきではない。この創刊号にも約四〇％のページを占めている研究論文は、人類学、民族学の専門誌にそのまま載せてもよいような内容のものである。論文の内容が決して悪いということではない。この雑誌が、「自然と人間」に関する真の学際的な、そして啓蒙的な雑誌をめざすというのであ

れば、これまでの学会誌とは異なる、しかし別の意味で厳しい編集方針にもとづく特色があつてしかるべきである。一部の既存学問分野の垂流の「學術誌」ならやめたほうがいい。この意味からも、関西でしか開かれていない研究会の会員に投稿を限るといふ同人誌的な発想にも大きな疑問を感じる。

地球の環境は確実に変わりつつ、あるいは変えられつつある。地球規模、地域規模を問わず、その変化をどう捉え、どう対処すべきかという視点での「人間と自然」の関係の再構築が迫られている。それは同時に、既存の、特に二〇世紀に発展した学問の枠組みの見直しを迫っており、自然科学と人文・社会科学、基礎科学と応用科学、専門家とシロウト、といった枠組みの見直しをも含むものである。

この意欲的な雑誌の成否は、このような問題意識を共有する市民やさまざまな分野の研究者との活発な交流と連帯をどこまで大切にするかにかかっているのではないか。フィールドワークにもとづく精緻な論文でも、既存の学界(学会)の狭い問題だけを念頭においてのものなら、この新しい雑誌が求めるものではないはずである。「自然と人間」や環境の問題に深い関心をもつ誰が読んでも楽しく、かつ啓蒙的な雑誌づくりをめざせるかどうか。次号以降の発展に大いに期待したい。